



羽根のない 天使たち

和乃 璃瑚

目もくらむようなネオンの中、雅史は周囲の目を気にしながら歩いていた。隣にぴったりと寄り添う少女は、雅史とは対照的に堂々としている。半ば引っ張られるようにして歩きながら、雅史は小さくため息をついた。

——こんなことしてる場合じゃないだろ。なんでこんなところ来ちゃったんだろ。

そんな雅史をよそに、その少女、カリナははしゃいだ声を上げた。

「私、ここがいい！ ね、ここにしょ」

カリナは、まるで喫茶店にでも入るかのように、ネオンの輝く入口をくぐっていった。

雅史がまたもやため息をついて入ると、カリナは今度は洋服を選ぶように部屋を選び、スタスタと歩いていった。

「ここ、来たことあるのかい？」

カリナに慌てて並びながら、雅史は聞いた。

「ううん、初めて。なんで？」

「いや……、随分慣れてるみたいだから」

「ああ」

カリナは軽く笑って答えた。

「ここは初めてだけど、どこも似たようなもんじゃん？」

「そんなにいろんなところに行ってるんだ」

カリナは足を止めて雅史のほうに顔を向けた。怒っているのか、きれいに整えられた眉の間に、ほんの少ししわが寄っている。

「おじさん、何が言いたいの？ こんなところまで来ておいて、今さら説教でもするつもり？」

「いや、そういうつもりじゃないんだけど……」

雅史が慌てて手を振ると、カリナはまた歩き出しながら言った。

「今どきの女子高生なんてそんなもんよ。真面目そうに見える子だって、やることはやってんだから。あ、ここだ」

廊下の奥から2番目のドアの前でカリナは立ち止まり、ドアを開けて中に入っていった。

室内はまるでマンションのモデルルームのようにおしゃれで、雅史の若い頃のような趣味の悪いケバケバしいものではなかった。

「何、おじさん。まさかこういうところ初めてなの？」

口をポカンと開けて室内を見回している雅史に、カリナが笑いを含んだ口調で言う。雅史は馬鹿にされたような気がして、少しムツとしながら言った。

「違うよ。ただ僕の若い頃とは随分雰囲気が違うなって思ってさ」

「そりゃそうよ」

カリナは冷蔵庫からビールを取り出して、勢いよくプルトップを引いた。おいしそうに喉を鳴らして一気に飲み、続けて言った。

「おじさんの若い頃って何年前だか知らないけど、かなり前でしょ？」

「そうだな。20年くらい前だな」

「へえ、そうなんだ。おじさん、いくつなの？」

カリナは雅史にもビールを手渡ししながら聞いた。

「39。あと半年で40になる」

「39なの？ もっといってるのかと思ってた」

「言いにくいことをはっきり言ってくれるね」

雅史が言うと、カリナは肩をすくめて舌を出した。

「ごめん。おじさん、傷ついた？」

「いいよ、慣れてるから」

「あ、やっぱみんなにもそう言われるんだ」

カリナは笑いながら言い、空になったビールの缶をテーブルに置いた。

「さて、と。シャワー、先に浴びてくるね」

カリナがバスローブを手に歩きかけた時、雅史は反射的に言った。

「いや、いいよ」

「え？」

カリナは浴室のドアノブを握ったまま、雅史のほうを振り向いた。一瞬、不思議そうな顔をしたが、すぐに分かったというような表情になった。

「おじさん、そのままのほうが好きなんだ。たまにそういう人、いるよね」

カリナが言いながら戻ってきて、服を脱ごうとする。雅史は慌てて両手でそれを制して言った

。

「そのままですってことじゃなくて、そういうことはしなくていいってこと」

カリナは、今度は本当に不思議そうな表情になった。

「つまり、何もしなくていいんだ」

「……」

「もちろん、ちゃんとお金は払うよ」

「……」

「……ごめん」

カリナが怒っていると思った雅史は、小さくなって謝った。するとカリナは、意外にもくすくと笑った。

「それじゃ、どうして私の誘いに応じたわけ？ まさか『エンコー』って言葉、知らないわけじゃないでしょ？」

「どうしてかな」

雅史は呟きながら考えた。

朝、いつも通り家を出た。喫茶店に入って1時間もかけてのんびりコーヒーを飲み、公園で本を読んだ。昼食には2時間もかけ、午後には奮発して映画を観た。同じ映画を2回観て、夜の街をぶらついている時にカリナに声を掛けられたのだ。

「おじさん、ちょっと遊ばない？ 3万でいいよ」

雅史の顔を覗きこむようにして言ったカリナに、そのまま何となくついて来たのだ。

「どうしてかな。たぶん、誰かとしゃべりたかったんじゃないかな」

「誰かとしゃべりたかった？ どういうこと？」

雅史は躊躇した。このことはまだ誰にも話していない。でも、と雅史は思い直した。
——でもどうせもう会わないだし。

雅史は軽く息を吸い込んで話した。

「1週間前、リストラされたんだ。でも女房には言えなくて、毎日同じように家を出て、いろんなことをして時間を潰すんだ。どうせいつか分かることだ。女房が会社に電話することがあるかもしれないし、そうでなくても給料日がくれば分かる。いつもと金額が違うだろうからね。だけど……」

雅史はぬるくなったビールに目を落とした。

「怖いから？ それとも恥ずかしいの？」

カリナがストレートに聞いてくる。

「どっちも正しいように思えるし、どっちも違うように思えるな。単純に認めたくないのかもしれない」

「自分がリストラされたって事実を？」

「いや、今後が大変になるってことをさ」

「それじゃ、リストラされたことは納得してるってわけ？」

カリナが少し驚いたように聞く。

「そうだな……。半分納得してるようなものかもしれないな」

カリナは何も言わないが、雅史の言葉の意味を計りかねているようだった。

雅史はベッドに横になり、天井を見上げて話した。

「僕は昔から要領が悪くてね。真面目だけが取り柄の子供だったんだ」

小学生の頃にクラスで人気のある子は、大抵スポーツ万能かユーモアのセンスがあるかだ。そこに少数派として勉強のできる子が加わる。

雅史はというと、足が遅くて運動会ではいつもクラスメイトの足を引っ張っていたし、冗談を言ったりすることもできなかった。いつも真面目に授業を受け、予習復習も怠ることはなかったが、成績は真ん中くらいだった。そんな雅史が人気者になれるわけがなく、結局6年間、この図式に当てはまることはなかった。せめてもの救いは、嫌われ者でもなかったことだ。クラスメイトたちは雅史を空気のように扱った。必要があるとき以外は話しかけてもこなかったので、雅史は自然と1人でいるようになった。初めはそれが苦痛だったのだが、慣れてくると平気になった。いじめられるよりはマシだと思ったし、何より気楽だった。

雅史は毎日学校でたくさんの本を読んだ。校庭の片隅の大きな木の下や誰もいない屋上は、雅史の特に好きな場所だった。本を開くと、いつも雅史はワクワクした。自分の知らない世界の話、現実にはあり得なさそうな話、ずっとずっと昔の話、自分の孫の孫くらいの時代の話。雅史は読みながら、主人公を自分と置き換えたりして楽しんだ。雅史の友達は、みんな本の中にいた。

中学時代や高校時代も、小学校の時のような毎日だった。前よりは友達ができたが、類は友を呼ぶと言われる通り、クラスになじめない者同士の集合だった。学校では一緒にいたりしゃべったりするものの、お互いに踏み込んで付き合うこともなかったし、もちろんクラブ活動もしていなかった。雅史は放課後には毎日本を読み、時には映画を観にいたりもした。

大学生になると、急に雅史の周りに人が集まるようになった。特に多いのはテスト前だった。そう、必ず授業に出席している雅史のノートが目当てだ。雅史は授業中にメモしたことやテキストの重要な部分を毎日ノートにまとめ直していた。字もきれいだったので、雅史のノートは参考書よりも見やすく、人気が高かった。口から口へとその評判は伝わり、雅史のまったく知らない人から、突然お礼を言われることも少なくなかった。授業はろくに受けなかった人でも、雅史のノートで勉強して『優』を取ったと喜ばれると、雅史は嬉しかった。ノートの持ち主である雅史はいつも『良』にしかならないのだが、それを腹立たしく思うよりも、自分でも誰かの役に立つと感じられて嬉しかったのだ。

苦労したのは就職活動だ。今までは自分をアピールしたり積極的に行動したりしなくてもよかったが、就職活動となると、そうはいかない。会社訪問をしたり、自分の長所や特技をアピールしたり、面接官が目留めてくれるようなことを言ったりと、自分から動かなければ何も始まらない。雅史はそういうことが一番苦手だったのだ。その上、アピールできるようなものも持ってはいなかった。そのため、筆記試験はだいたいパスするのに、面接でことごとく落ちた。

雅史はもちろんのこと、両親でさえ、もう就職は無理かと諦めかけていた時、小さな会社から採用の連絡が来た。雅史を気に入ったというより、採用が決まっていた人が急にだめになったからという理由だったが、それでも両親は大喜びした。

入社してからは、毎日が戦争のようだった。毎日新しいことをどんどん覚え、実践していかなければならなかった。ただ、配属されたのが総務部だったので、真面目にコツコツやるタイプの雅史には合っていた。相変わらず人付き合いは下手で、同僚たちと飲んで帰ることもなかったが、仕事は順調だった。

そんな時、雅史に見合いの話が舞いこんだ。母親の知り合いで世話好きな人がいて、「雅史くんもそろそろ」と持ちかけてきたのだ。写真を見ると、雅史にはもったいないくらいの美人だった。

「こんな美人、僕には合いませんよ。先方さんだって嫌に決まっていますよ」

驚いて言った雅史に、そのおばさんは自信満々で答えた。

「実はね、先方さんの条件は『とにかく真面目な人』ってことなのよ。ね？ 雅史くんにぴったりじゃないの。1度会ってごらんささいよ」

「でもいくら真面目な人がいいと言っても、それだけじゃないでしょうし……」

雅史がまだ躊躇していると、周りには誰もいないのに、おばさんは雅史と母親に顔を寄せて小声で言った。

「どうやら先方さん、今までかなり男に泣かされてきたらしいのよ。ヒモみたいな男もいたらしいし、暴力を振るう男もいたらしいのよ。それに遊び好きの浮気者もいたみたいだし、それから何だったかしら……」

「もういいですよ。分かりました。会うだけ会ってみますから」

雅史は慌てておばさんの話を遮った。自分の知らないところで、直接知らない人が嬉々として自分の辛い過去を話しているなんて、その女性が気の毒に思えたのだ。それに聞けば聞くほど、そんな過去がなければ会ってもらえないはずだという事実を突きつけられているようで、さすがの雅史もいい気分ではない。横目でそっと母親を見ると、母親も複雑な表情をしていた。母親の場合は、息子の嫁になるかもしれない女性が数多くの恋愛遍歴を持っていることも気になるのかもしれないなかった。

とにかく、そんなこんなで雅史はお見合いをすることになった。当日は、どうせ断られると思っている雅史よりも、同行してきた両親のほうが緊張しているようだった。

「着崩れしてないかしら。お父さん、どう？ 大丈夫かしら」

としきりに襟元や帯を気にしている母親に

「母さん、少しは落ち着いたらどうだ」

とたしなめた父親も、テーブルの下では足を小刻みに揺すり、ハンカチを広げたり畳んだりを繰り返している。

そんな両親をよそに、高そうな絨毯やシャンデリアを何となく眺めていると、個室のドアが開いた。

「さ、さ、どうぞ。こちらにお座りになって」

入ってきた親子に、おばさんが言う。

今日集まった中で1番張り切っているのは、たぶんこのおばさんだろう。もしかしたら着物まで新調したかもしれない。

仁美という見合い相手の女性は、写真よりさらに美人だった。深い赤に色とりどりの模様が入った振袖は、意志の強そうなキリッとした顔立ちによく似合っていた。

——こんな女性だったら、そこらじゅうの男が放っておかないだろうな。こんな美人、そうそういないよな。

自分が今、その張本人と見合いをしていることも忘れ、雅史は考えていた。

——それなのになぜ、今までまともな男と付き合えなかったんだろう。どうしようもない男が好きなのかな。それとも、彼女に何か問題があって振られたのに、プライドがそれを許さずに、そういう話を作ってるって可能性もあるよな。

「雅史！」

頭の中であれこれと考えていた雅史は、母親の声で我に返った。見ると、母親が雅史をにらんでいる。どうやら何度も呼ばれていたらしい。

「いやぁね、雅史くんったら。仁美さんがあんまりきれいだから見とれてたんでしょ」

おばさんが助け舟を出してくれたので、雅史はそれに乗っかることにした。

「はい。びっくりしました」

雅史が言うと、仁美は照れくさそうに微笑み、仁美の両親は自慢げに笑いながら言った。

「そんなことはありませんよ。この程度ならどこにでも転がってますからね」

——そこまで言うとは完全に嫌味だな。

雅史は思いながら、一応口元を緩めておいた。

「本当はあまり来たくなかったんじゃないですか？」

よくドラマで見ると、仁美が口を開いた。「あとは若い2人で……」なんて庭に追い出され、仕方なく散歩していると、仁美が口を開いた。

「え？ どうしてですか？」

「だってさっきからずっと、何もおっしゃらないから」

確かにそうだった。庭に出る前も質問されたら答える程度だったし、庭に出てからは何もしゃべっていない。

「そういうわけではないんですが、僕はおしゃべりが苦手なんです。昔からあんまり友達付き合いもなかったし、気の利いたことも言えなくて」

「そうなんですか。よかった。嫌われてるのかと思ってました」

「嫌うなんて。ただ……」

「ただ？」

「正直言うと、不思議には思いました。あなたみたいな美人が、僕みたいに趣味もなく遊びにも出掛けられないような男と見合いするなんて、と」

雅史が言うと、仁美は微笑みながら言った。

「真面目な方なんですね」

やはりおばさんの言う通り、『真面目』というのは仁美にとってキーワードのようだった。ただ、『真面目』というのは、いい点でもあれば悪い点でもあるのだ。雅史はそれを口にした。

「真面目というより、ただ面白みがないだけです。ただのつまらない男です」

別に自分を卑下するつもりはなかったが、雅史は本当にそう思っていた。自分には女性を楽しませることはできないと思っていたのだ。ましてやこんな美人で今まで楽しいことをたくさんしてきたであろう女性なら、きつとつまらなく感じるだろうと思っていた。

ところが仁美は、雅史の考えとは正反対のことを言った。

「もし私のことが嫌いではないのなら、結婚を前提に付き合ってもらえませんか？」

雅史はあまりに驚いて、ただ眼を見開いて仁美を見るばかりだった。

「お願いします」

さらに重ねて仁美に頭を下げられて、雅史はつい、頷いてしまった。

両親とおばさんは、この顛末を聞いてさらに驚いた。失礼な話だが、見合いを勧めておいて、当然断られると思っていたようだった。

しばらくして結婚が決定した時の周囲の驚き方は半端ではなかった。結婚式で仁美を見た男たちは一様に雅史を羨ましがり、どうやって結婚までこぎつけたのかと詮索した。実は雅史が大金持ちで仁美はそれを目当てに結婚してのだとか、仁美は元々は美人ではなく整形しただけだとか、中には雅史が仁美の弱みを握り、無理やり結婚させたのだと言う人までいた。実際は、ただ真面目だったからという単純な理由だったのだが。

結婚と同時に思い切って一戸建てを購入して新しい生活を始めた。相変わらず真面目だけが取り柄の雅史と仁美の生活は単調でつまらないものだったが、裏を返せば穏やかな幸福だった。休日にも出掛けることはなかったが、DVDをレンタルしてきては二人で映画を観たりした。幸い仁美も映画は好きだったので、映画や読書以外の話題を持たない雅史も助かっていた。

4年後には待望の子供が生まれた。妊娠が分かってから、2人でたくさん名前を考えた。その中で仁美が1番気に入ったのが、『百花』という名前だった。双方の両親も賛成してくれたので、その名前に決定した。

普通、女の子は父親に似ると言われるが、運よく百花は仁美に似ていた。ひいき目なしに見ても、赤ちゃんモデルになれそうなくらいだった。祖父母はこぞっておもちゃを買い与え、家の中はおもちゃだらけで足の踏み場もなかったが、それもまた幸せを象徴しているように思えた。

百花が3歳になって保育所に入ろうとしていた頃、雅史に転属命令が出された。転属先は営業部だった。人としゃべるのが苦手な雅史にとって1番辛い部署だったが、仁美と百花のために、雅史は必死になって頑張った。

「でもやっぱりだめだったんだ。毎日あちこち行くんだけど、たいした結果が出なくてさ。そうするうちに会社の営業状態が悪くなってきて、リストラが行われることになったんだ」

「それでおじさんに白羽の矢が立ったってわけか」

「僕の成績からしたら当然だろうな。だから、リストラされたこと自体はそれほどショックではなかったんだ。上司に呼ばれた時は、やっぱりきたかって感じだったな。いつ呼ばれるか、いつ呼ばれるかと気が気じゃなかったから、逆にほっとしたのかもしれない」

雅史は起き上がって冷蔵庫から新しいビールを取り出した。普段はあまり飲まないのだが、何となく飲まずに話せなかった。立ったまま乾いた喉を潤すと、ベッドに腰掛けてビールを眺めながら言った。

「たださ、これからのことを思うと不安でね。来年には百花も小学校に上がるし、家のローンだってまだまだ残ってる。家計を切り詰めながら、すぐにでも再就職先を探さないって思っはいるんだけどね」

「苦手な就職活動を、またやんなきゃなんないんだ」

「うん。たぶん前よりも厳しいだろうね。年齢も年齢だし、特技もないし、このご時勢だから」

「だから奥さんにも言いにくいの？」

「そうだな。きっとがっかりするだろうと思ってね。真面目な人と結婚したいって裏には、安定した生活を望む気持ちがあったと思うんだ。なのにこんなことになっちゃって、きっと仁美はがっかりするだろうと思うよ」

「でも奥さんに言わないわけにはいかないでしょ？ 後でばれるより、おじさんから言ったほうがいいんじゃない？ いつまでも黙ってたってしょうがないじゃない」

「分かってるよ、そんなこと！」

雅史は思わず声を荒げた。カリナがびっくりして黙り込む。2人の間に重苦しい沈黙が流れた。

「ごめん」

先に口を開いたのはカリナだった。

「私、余計なこと言っちゃったね」

「いや、いいんだ。僕のほうこそ、怒鳴ったりして悪かった。正しいのは君なのにね」

雅史はため息混じりに言った。

「分かってるんだ、頭ではね。毎日毎日、今日こそ言おうって思うんだ。『もう会社に行かなくていいから』って言おうとして、朝いつも通りに起きないでいるだろ。仁美がもう1度僕を起こしに来る足音を聞きながら、何度もそのセリフを頭の中で繰り返すんだ。なのに仁美に『具合でも悪いの？』って聞かれると、『いや、大丈夫』って言いながら出勤準備をしてしまうんだ。帰ったら言おうって決心して帰っても、仁美が百花の話をしだすと、つい『明日でいいか』って思ってしまうんだ。結局は逃げてるだけなんだけどね。我ながら情けないよ」

「分かるよ。絶対しようと思ってるのになかなか踏み出せないってこと、あるよね。すごくその気持ち分かるのに、私ったら偉そうに……」

カリナが少し悲しそうに見えた。

「君も何かあったのかい？」

気になって聞いた雅史の言葉には答えず、カリナは明るく言った。

「でもさ、奥さんと結婚してから……、10年？ 10年もずっと一緒に生活してきたんだもん、きっと大丈夫だよ。がっかりなんてしないよ。一緒に頑張ってくれるよ、きっと。だって夫婦なんだもん。夫婦なんだから」

雅史をまっすぐ見つめて言うカリナに、雅史はいつしか勇気づけられていた。

「そうだな。うん、頑張ってみるよ」

笑顔で頷いたカリナは、ふと思いついたように言った。

「でもおじさん、『おしゃべりは苦手』なんて言ってたけど、ここに来てからは結構しゃべってるじゃない。充分、私との会話、成り立ってるよ」

「そうだな。それはきっと」

雅史が苦笑いしながら言いかけた時、部屋の電話が鳴った。フロントからの連絡で、『あと10分で泊まりに切り替わるがいいか』ということだった。

「いえ、もう出ます」

雅史は受話器を置いて、少し考えて言った。

「また会えるかな」

「え？」

カリナが驚いて聞き返した。雅史は誤解されないように、慌てて言った。

「もちろんこういう場所じゃなくて、普通にだよ」

カリナが雅史の慌てぶりに笑う。

「さっきの話だけど、僕が今日こんなにしゃべってるのは、相手が君だからだと思うんだ。君と僕は、これからずっと付き合っていかなければならない間柄ではない。今日だけで終るはずの2人だった。だからこそ、まだ誰にも話していないリストラのことを君に話せたんだ」

「だったらまた会ったら、今日みたいには話せないんじゃない？」

「いや、僕らがいつでも終わりにできる間柄だってことには変わりはないからね。もう2度と会わないことにいつでもできるから、気楽に話せると思うんだ」

「なるほどね。変な理屈のような気もしないでもないけど」

カリナは笑いながら納得した。

「本当は今日、もう少ししゃべっていたいんだけど、未成年の君をそんなに引き止めるわけにはいかないしね。ご両親も心配するだろうし」

ドアに向かいながら雅史が言うと、カリナの寂しげな声が聞こえた。

「心配ね……。しないと思うけど」

「え？」

雅史が振り向くと、カリナはまた明るい顔を作ってからかうように言った。

「それより未成年とこんなところに来たほうが問題じゃないの？」

「ほんとだ。とんでもないことをしたもんだよ、僕も」

2人は笑いながら部屋を出た。場所がラブホテルでなければ、仲のよい親子のようだった。

「ね、おじさん。メアド教えてよ。また会う日、決めなきゃなんないから」

「そうだな。ちょっと待ってくれよ。自分のアドレス覚えてないんだよな」

雅史はそう言いながら、携帯のプロフィールを呼び出した。カリナがそれを見ながら自分の携帯に登録していく。

「名前は？ アドレス帳に入れるのに名無しじゃ不便だよ」

「ゴトウマサシ。ゴトウはよくある後藤、マサシは優雅の雅と歴史の史」

「オッケー。じゃ、私からメールするから、それを登録して」

カリナがものすごい速さでメールを打つと、すぐに雅史の携帯が鳴った。

「えっと、『小島カリナ』ちゃんだね。なんか芸能人みたいな名前だな」

雅史は感心しながら登録した。

ホテルを出ると、駅まで送るという雅史の申し出を断り、カリナは手を振った。

「じゃあね、後藤さん」

「気をつけて帰るんだよ」

「うん。バイバイ」

カリナの後ろ姿を見送った雅史は決心した。

――今日こそは仁美に話そう。せっかくこうやって勇気をもらったんだから。

「ただいま」

雅史が玄関を開けると、仁美が唇に人差し指を当てながら出てきた。

「おかえり。今ね、百花が寝たところなの。パパの帰りを待ってるって頑張ってたんだけど」

百花の部屋は玄関の脇にあるため、仁美は小声で話した。雅史は頷いて、そっとスリッパを履いた。

リビングに入ると、雅史は上着を脱いで深呼吸した。

「仁美、ちょっと話があるんだ」

雅史が台所にいる仁美に声を掛けると、仁美は食器を片付けながら聞き返した。

「話？ なぁに？」

「うん……。悪いけどこっちに来て座ってくれないかな」

仁美は怪訝そうな顔をしながらも、作業をやめて雅史の前に座った。

「どうしたの、改まって」

「実はさ、明日、会社に行かなくてもいいんだ」

「そうなの？ 創立記念日か何か？」

リストラなどとは夢にも思っていない仁美は、無邪気に言う。

「それなら明日、百花に幼稚園休ませて、ランドセル買いに行かない？ 平日なら空いてるだろうし。それに学習机も買わなきゃね。せっかくデパートに行くなら、こまかいものもついでに買っておこうかしら」

雅史が黙っていると、仁美もようやく何かがおかしいと気付いたようだった。

「何？ そういうことじゃないの？」

「明日だけじゃないんだ」

「え？」

「会社に行かなくていいのは、明日だけじゃないんだ。これからずっと、もう2度と行かなくていいんだ」

仁美は目を見開いて、言葉を失っていた。頭の中をいろんなことが駆け巡り、うまく言葉にならないのだ。

「会社の業績が悪化して、リストラが行われたんだ」

「リス……トラ……」

仁美はまだ呆然としている。

「営業に異動してからの僕は、お世辞にも会社に貢献していたとは言い難いからね」

「これから……、これから私たち、どうなるの？」

「もちろんすぐに再就職先を探すよ。12月でいろいろ物入りだし、百花の小学校の準備もあるって時に悪いけど、生活も少しずつ切り詰めてもらえるかな」

「再就職先なんて、簡単に見つかるかしら」

「そりゃ簡単にとってわけにはいかないかもしれないけど、やるしかないじゃないか」

「そうね……」

「大丈夫。頑張るから。なるべく早く見つけるからさ。少し時間をくれないか」

「……分かったわ」

翌日から、雅史の就職活動が始まった。雅史にとっては辛い日々だったが、仁美と百花のために少しでもいい会社に入ろうと思っていた。

雅史が再就職先を探し始めてから1ヶ月ほどして、久々にカリナと会うことになった。

サラリーマンやOLたちがいなくなり、やっと一息つく頃のカフェで待ち合わせだった。と言っても、冬休み中なので、街全体が賑わってはいたが。

待ち合わせ時間を少しだけ過ぎてやってきた雅史は、店の入り口で首を伸ばしてカリナを探した。

「いらっしゃいませ」

若い店員に声を掛けられ驚いた雅史は、ひっくり返った声で慌てて言った。

「ま、待ち合わせなんです」

その声気付いたカリナが、店の奥から手を上げた。

「後藤さん！ こっちこっち」

雅史は店員に軽く会釈し、早足でテーブルまで行く。

「どうしたの？ 寒いのにそんなに汗かいちゃって」

「冷や汗だよ。こんなオシャレなお店なんて来たことないんだよ。なんか場違いな気がしてさ」

雅史はハンカチで汗を拭いながら、周囲を見回した。

「店員さんもお客さんもオシャレな人ばかりだし、こんな冴えないオヤジは1人もいないだろ。なんだか恥ずかしいよ」

「気にしない、気にしない。ま、確かに似合ってはいないけどね」

カリナはいたずらっぽく笑う。雅史も「ひどいなあ」と言いながら、つられて笑った。

「で？ 就職活動はどうなの？」

カリナが真顔になって聞いた。

「全然だめだよ。早く見つけないって思うんだけどね」

「まあゆっくり探すしかないんじゃない？ このご時勢だもん」

「そうなんだけどさ。でも仁美と百花のことを考えると焦るんだよな」

「奥さんには何か言われるの？」

「いや、何も言わない。僕がリストラされたってことを話してから、1度もその話をしないんだ。翌朝からずっと、今までと変わらない様子で毎日を過ごしてる。ただ……」

「ただ、何？」

「時々、ぼーっと何かを考え込んでいるようなことがあるんだ。気になって1度どうしたのか聞いたことがあるんだけど、『何でもない』って言い張るんだ。僕もそれ以上は聞きにくくて、そのままにしてるんだけどね」

「ふう～ん。今まで通りに振る舞ってても、やっぱり今後が心配なんだろうね」

「そうだと思う。だから余計に焦るんだ。ま、頑張るしかないよ」

気持ちを切り替えるように、雅史は運ばれてきたアイスコーヒーに口をつけた。

「後藤さん、ついに初めの1歩を踏み出したって感じだね」

「そうだな。やっとのことでね」

雅史は苦笑いした後、カリナに聞いた。

「カリナちゃんは？」

「え？」

「カリナちゃんも何かあるんだろ？ したいのにできないでいることが」

「……なんで？」

「この前の夜、そんな感じがした。ご両親の話をした時も様子を変だったし」

「へえ、後藤さん、なかなか鋭いんだね。就職活動やめて、占い師にでもなれば？」

茶化して言うカリナに、雅史は釘を刺した。

「真面目に聞いているんだよ」

「……ごめん」

カリナはそれきり黙りこんでしまったが、雅史は辛抱強く待った。グラスの中身をストローでかき混ぜてみたり、グラスについた水滴をふき取ったり、店内を見回したりしていると、カリナが口を開いた。

「時間つぶすの、もう限界？」

「そうだね、かなり」

雅史が真顔で言うと、カリナはくすっと笑ってから深呼吸した。

「私ね、昔からの夢があるんだ」

「夢？」

「うん。小さい頃からからずっと、歌手になりたかったの。小さい頃はね、単純にかわいい服が着られるからって理由だった。でもある時から、そうじゃなくなったの」

「ある時って？」

カリナはカフェオレをひと口飲んで、話した。した。

「私ね、親にとっては邪魔な子なのよ」

カリナの両親は2人とも教師だ。違う学校で働いていたのだが、複数の学校の教師たちが集まったの勉強会で2人は出会い、惹かれ合った。お互いの教育論を語り合ううち、2人の思いは自分たちの子供へと向かうようになり、ごく自然に結婚した。

2人の願いは、教育のプロとして立派に自分たちの子供を育て上げることだった。聡明で思いやりがあって、自分の意見をしっかり持ちながらも協調性がある、そんな誰から見ても完璧な子供を、自分たちなら育てられると思っていた。

やがて生まれた女の子に、2人はカリナという名前をつけた。カリナは両親の愛情を一身に受けて、すくすくと育っていった。

小学校に入り、カリナがテストでいい点をとったり何かいいことをする度に、両親は喜んだ。カリナは両親の喜ぶ顔を見たくて、何をする時でも全力でやった。

塾に通うことはしなかったが、毎日宿題以外にもたくさん勉強をした。塾に通わなくても、それ以上に勉強ができるようにというのが、両親の方針だったのだ。

もちろん、両親は勉強だけでなくスポーツにも熱心だった。毎朝カリナは早起きをして、両親と一緒にランニングをしていた。家の近くのスイミングスクールにも通った。

毎日の努力のお陰で、カリナの成績は6年間トップクラスだったし、運動会でもいつも活躍していた。両親はそんなカリナを見て、とても嬉しそうだった。

「カリナはほんとに偉いわね」

「さすがお父さんたちの子供だ」

「カリナのこと、誇りに思うわ」

両親の誇らしげな様子を見て、これほどまでに両親に愛されている子供はいないだろうと、カリナは思っていた。

その気持ちに初めて疑問を持ったのは、中学2年の時だった。

その日カリナは、朝から熱っぽかった。体も頭も重く、動くのも億劫なくらいだったが、カリナは学校へ行く準備をしていた。その日はちょうど中間テストだったのだ。いつも通りに学校へ行ったカリナだったが、熱はさらに上がっているようだった。

——こんなことなら、お母さんに話して休めばよかったかな。

カリナはそう思ったが、せっかく来たのだからと試験を受けた。

試験科目はカリナが1番得意な数学だったのだが、熱のせいで頭がぼーっとして、ろくに集中できなかった。まるで頭の中に薄い膜がかかったような感じで、問題を読んでもなかなか頭に入っていない。やっと問題を理解しても、今度は答えを出すまでに時間がかかった。

他の教科も結局そんな調子で終わり、カリナはやっとのことで家までたどり着いた。氷枕を作ってベッドにもぐりこんだカリナは、あっという間に眠りに落ちていた。

「カリナ、いないの？」

母が言いながらドアを開けた時、カリナはようやく目を覚ました。

「いたの？ 帰ってきたら家中真っ暗だったから、いないのかと思ってびっくりしたわ」

窓を見ると、外はもう暗くなっている。時計を見ると、7時になっていた。

「おかえりなさい。熱があったから、帰ってきてからずっと寝てたの」

「まあ、熱があるの？」

母が心配そうにベッドに近寄ってくる。

「うん。朝から熱っぽかったんだけど、学校行って上がっちゃったみたい」

「朝から？ それじゃ、試験は？」

「一応受けたけど、頭が働かなくて、半分くらいしかできなかった」

カリナが肩をすくめて言うと、母は眉間にしわを寄せて言った。

「それなら休めばよかったのに。明日は休みなさい。治るまでずっと休んでいいから」

「でも試験なのに」

母に心配される心地よさを感じながらそう言ったカリナに、母は呆れたように言った。

「ばかね。病欠なら一定の点数として判断されるの。でも無理して試験受けて、点数が悪いと恥ずかしいでしょ？」

「……」

「じゃ、お母さん、晩ご飯の準備してくるから。できたら呼ぶから、もう少し寝てなさい」

「……うん」

カリナは薄暗い部屋の中で、閉められたドアを見つめていた。

——恥ずかしい？ 「休めばよかったのに」って言ったのは、私が病気で辛いだろうからってことではなくて、点数が悪いと恥ずかしいからなの？

カリナの胸の中に、小さなしこりが生まれたのはこの時だった。それでもカリナは、自分の中でそのしこりを排除しようとした。

——違うよね。お母さんは、私の成績が下がったらかわいそうだと思って言っただけ。その言い方がちょっとおかしくなっただけ。ただそれだけだよ。

自分にそう言い聞かせて、カリナはきつく目を閉じた。

するとまぶたの中の暗闇に、父と母の顔や今までの出来事が次々に浮かんだ。テストでいい点をとった時、徒競走で1等になった時、スイミングの昇級試験に受かった時、近所のおばさんに誉められた時。父も母も、いつも嬉しそうに誇らしげだった。

――だけど……。私が何か失敗したり、いい結果を出せなかった時は？

カリナは自問した。

――私が徒競走で転んだ時、お父さんもお母さんもおっかりしたような顔をしてた。すぐに立ち上がって一生懸命走ったけどビリになって、泣きそうになりながらお父さんたちのところに行っても、2人とも慰めてはくれなかった。「次に出る種目では頑張るのよ」って言うだけだった。あの時私は、2人のことがなんだか別人に見えたんだ。転んで擦りむいた膝の痛みより、次はちゃんとやらなきゃって思いのほうが強くなったんだ。その後ちゃんと1等賞を取って、いっぱい誉めてもらったから忘れてたけど……。

考えれば考えるほど、そんなことばかりが思い出された。もう眠るどころではなかった。カリナは子供の頃からの出来事を、順を追って思い出していった。そして、今の自分までたどり着いた時、ひとつの答えが出た。

――私は、愛されてたわけじゃない。

自分で出したはずの答えが、カリナの胸を深く鋭く突き刺した。

――お父さんとお母さんは、ただ作品を作りたかっただけなんだ。自分たちの満足のいく、皆から評価される作品を。

そんな風に考えて呆然としていると、母がドアをノックした。

「カリナ、ご飯できたわよ。食べられる？」

「うん。すぐ行く」

いつも通りに答えたカリナだったが、胸の中のしこりは消えなかった。

複雑な気持ちで食事をし、熱があることを口実に自分の部屋に閉じこもったカリナは、ベッドの上で膝を抱えた。

――愛されてたわけじゃないなんて思いたくない。そんなの信じたくない。でもそう考えれば、すべての辻褄が合う。私は一体、何のために生まれてきたの？

カリナは、階下にいる両親に泣き声が聞こえないように、ラジオをつけて布団にもぐり、声を上げて泣いた。辛いとか悲しいとか、そういう具体的なことではなかった。とにかく混乱していた。訳が分からなくて、涙が止まらなかった。全身の水分を絞り出すように泣き、ようやく涙は止まったが、それでも頭の中はまだ混乱していた。

考えることに疲れ、泣くことにも疲れ、カリナはただ何となく、ラジオに耳を傾けていた。

「その時にね、たまたま流れてきた曲があったの。誰の何ていう曲かは分からないんだけど、それを聞いてたらなぜだかほっとしたの。歌詞そのものではなくて、曲の雰囲気『大丈夫だよ、君は君でいいんだよ』って私に言ってるように思えて」

カリナはそこまで言って、照れくさそうに笑った。

「なんか変だよ、こんなの」

「そんなことないよ」

雅史は首を振って微笑んだ。

「それで本気で歌手を目指そうと思ったんだね」

「そう。いつか私も、誰かの心に届くような歌を歌えたらなって」

「いいじゃないか。そういう気持ちで歌うって、大切なんじゃないかな。それに名前も芸能人っぽいし」

雅史がおどけると、カリナも笑った。

「でもさ、『邪魔な子』ってことはないんじゃないのかい？」

雅史が言うと、カリナは途端に暗い表情になった。

「ううん、ほんとに邪魔な子なのよ」

「どうしてそう思うの？」

「あの時から、私は一生懸命何かをするってことをやめてしまったの。なんだか馬鹿らしく思えてきて。そうすると当然、成績だって下がるでしょ？ ひとつ上げるのでも大変だったのに、下がるのはあっという間だったな」

カリナは自嘲気味に笑った。

「それで、ご両親は？」

「そりゃもちろん、怒ったよ。初めに成績表を見た時は、目が点になってたけどね」

カリナは笑いながら肩をすくめた。

「勉強もスポーツも適当にこなすようになって、もちろん朝のランニングだってやめて、学校さえも時々ずる休みしたりして……。お父さんもお母さんも、初めは訳が分からないって感じだったけど、そのうち怒りだして、毎日毎日怒られてた。でも私は元には戻らなかった。戻りたくなかったの」

カリナは一息ついて、氷が溶けて薄くなってしまったカフェオレを飲んだ。

「私がひとつだけ一生懸命になりたいもの、それが歌なの。それ以外はどうでもいいの」

「ご両親はそのこと知ってるの？」

「ううん、言ってない。どうせ否定されるんだから。自分たちの思い通りにできない子供は、自分たちの子供だと認めたくないのよ、あの人たちは。それに歌って、勉強とは違って、一生懸命やっても結果が出るとは限らないじゃない？ 結果が出なかったら、お父さんたちは『そらみたことか』って言うに決まってる。2人で私のことを笑うに決まってるのよ」

怒ったように、でも悲しそうに言うカリナに雅史は言った。

「そんなことないよ」

「え？」

「そりゃ、ご両親にはご両親の理想があったのかもしれない。それをカリナちゃんに押し付けるような表現をしてしまっていたかもしれない。だけど、だからと言って愛してなかったとは言えないよ。自分の子供を愛してないわけがないじゃないか。カリナちゃんの気持ちをちゃんと話せば、分かってもらえるはずだよ。カリナちゃんが傷ついたこと、本当にやりたいと思っていることを、きちんと話してもいないのに、決めつけるのは早いんじゃないかな。ただ単に、歌を本

「気でやる勇気がないのをご両親のせいにしてるだけじゃないのかい？」

カリナはしばらく雅史を見つめていたが、うつむいて小さく呟いた。

「分かったようなこと、言わないでよ」

そして雅史をにらみつけて、店内に響き渡る程の声で言った。

「なんにも知らないくせに！　ずっと信じてたものに裏切られた時の私の気持ちなんて分からないくせに！　偉そうなこと言わないでよ！」

カリナはコートを一ひつつかむと、走って店を出ていった。店中のあちこちから、雅史に視線が集中していた。雅史には、ただその視線に耐えることしかできなかった。

それから1ヶ月、カリナからの連絡はなかった。もともと頻繁にメールのやりとりをしていたわけではなかったが、1ヶ月も何も無いのは初めてだった。

――まだ怒ってるんだらうな。もしかしたらもうこのまま連絡はこないかもしれないな。まあしょうがないか。もともと1日で終わるはずだったんだし。

残念に思いながらも、雅史は納得しようとしていた。連絡はくれなくてもいいから、自分のやりたいことを大切にしてほしいと願っていた。あの年齢で、自分の本当にやりたいことを自覚できることは少ない。せつかくそれを自覚できたのなら、やはり行動に移してほしいかった。やらずに後悔して生きていくことだけはしてほしいくなかったのだ。雅史にとって、カリナは年の離れた妹のような存在だった。

――カリナちゃんに言ったら「妹なんて厚かましい、娘じゃないの？」とかなんとか言われるだらうな。

そう考えながら苦笑いした途端、ポケットの中で携帯が震えた。取り出して見ると、それはカリナからのメールだった。

『小島カリナ、本日路上デビュー。〇〇駅前広場にて。午後7時に来るべし』

カリナからの久々のメールは簡単なものだった。いつもたくさん使う絵文字もひとつもなかった。それだけにカリナの決意が感じられた。

「よしっ」

雅史は小さくガッツポーズをして歩き出した。

駅前の喫茶店で軽く夕食をとってから広場に向かう。時計を見ると、まだ7時にはなっていないかった。

駅前広場にはたくさんの路上アーティストがいた。ギターを弾きながら歌ったり、自分の作品を売ったり、思い思いの形で自分を表現している。雅史が若い頃には滅多に見ることのなかった光景だった。いささかジェネレーションギャップを感じながらあたりを見回すと、キーボードの前に座ったカリナが見えた。

マフラーをぐるぐる巻きにしたカリナの顔は、寒さと緊張のせいでこわばっていた。雅史は少し離れたところに立ったのだが、カリナの前には誰もいないので、すぐに見つかってしまった。

カリナの目が雅史をとらえ、一瞬複雑な表情になった。雅史が見に来た喜び、初めての路上ライブへの不安、1歩踏み出すことへの興奮、その他もろもろの気持ちがごちゃ混ぜになったような表情だった。

雅史が頷くと、カリナも頷いてキーボードに手を置いた。カリナが目を閉じて深呼吸をすると、スピーカーから柔らかい音が流れてきた。

伴奏に合わせて聞こえてくる歌声は、雅史が思っていたよりも優しいものだった。強くうたっているわけではないのに、何かを訴えかけてくるような感じだった。曲は、カリナが作った曲なのか、雅史が最近の曲に疎いだけなのか、とにかく雅史のまったく知らない曲だった。にもかかわらず、心が穏やかになるような、懐かしい感じがした。

広場をせわしなく歩いていく人たちは、カリナの前ではほとんど足を止めることはなかった。少し離れたところでガンガン音を鳴らして怒鳴っているバンドの前には、座り込んでまで聞いている人がいる。雅史にしてみれば、カリナのほうがよっぽどよかったので、不思議に思えた。

「路上デビュー、おめでとう」

カリナの演奏が終わると、雅史はカリナに声を掛けた。

「ありがと。お世辞にも大成功とは言えないけどね」

カリナは肩をすくめて笑った。結局最後まで、カリナの前で足を止める人はいなかったのだ。それでもカリナの顔は、満足げに輝いていた。

「なににせよ、偉大なる第1歩だよ」

雅史が言うと、カリナは頷いた。

「ほんと。かなりの勇気がいったわ」

カリナはキーボードをいじりながら続けた。

「あの時さ、後藤さんに『本気でやる勇気がないのを親のせいにしてるんじゃないか』って言われたじゃない？ あれ、凶星だったのよね。もちろん自分ではそんなつもりはなかったんだけど、後藤さんに言われた瞬間、グツときたのよ、『そうかも』って。でも認めたくなくて、怒っちゃったの。あの時はごめんなさい」

「いや、そんなこと」

「でもね、やっぱいろいろ考えると、後藤さんに言われた通りだなって思ったの。それにこのままやらずにいたら、きっと後悔するって。なら、たとえ親に馬鹿にされてもやろうって思ったの」

「ご両親には話したの？」

「うん。もう今日の準備を整えてから、昨日の夜に言った。『私、歌手になりたい。本気で歌をやりたい』ってね」

「ご両親は何て？」

「やっぱり呆れてた」

カリナは苦笑いしながら言った。

「『そんなもの、なれるわけがない』とか、『いい大学に入って就職して、立派な人と結婚すべきだ』とか、もう何を言われたか忘れるくらい、いろいろ言われたよ。それで結局また喧嘩になっちゃって」

「そうか。ということは、今までのカリナちゃんの思いは話せてないんだな」

「そうなの。でもまたちゃんと話してみるつもり。いつまでも逃げてらんないしね」

「いつか、カリナちゃんの歌を聞きにきてくれたらいいね」

「あー、それはかなり難しそうだなあ」

カリナは首を大きくひねって笑った。

それからしばらくは、2人は会うことはなかった。と言っても付き合いが途切れたわけではなく、メールでの近況報告は時々やりあっていた。

雅史は相変わらず就職活動に奔走していたが、なかなか新しい仕事は見つからなかった。仁美はそれでも何も言わなかったが、それが逆に雅史にとって辛くもあった。とにかく早く見つけなければと思うのだが、その思いは空回りするばかりだった。

カリナは路上で歌う曲を作ったり、いつかCDを出すための資金を作ろうとバイトしたりと、忙しくしていた。高校をやめてしまおうかとも考えたのだが、雅史の助言もあって、きちんと卒業することにした。

路上ライブをするようになってからは、カリナの中の投げやりな気持ちが消え、授業も真面目に受けるようになった。ただ、両親との話し合いは、何度やっても決裂に終わっていた。

3月も後半に入って暖かくなってきた頃、雅史は仁美から重大な決断を聞かされた。

「別れてほしいの」

仁美はただひと言、そう言った。

雅史が言葉を失っていると、仁美は説明もせずに離婚届をテーブルに広げた。

「もう私の名前は書いてあるから、あとはあなたが書いて提出して。実家に帰るから、この家はいらないわ。でも百花は私が引き取りたいの」

それだけ言うと、仁美は黙り込んだ。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ」

雅史は慌てて言った。

「急にそんなこと言われても。どうして？ いや、どうしてって僕がリストラされたからかもしれないけど、就職活動は一生懸命してるし、君だって『分かった』って言ってくれてたじゃないか。それとも他に何か理由があるのかい？」

「確かにあなたは毎日頑張って再就職先を探してくれてる。でも現実は厳しくて、なかなか見つからないじゃない。あれから3ヶ月よ。この先、いつになったら見つかるの？私、百花に不自由な思いをさせたくないの。ずっと不安なままいるのも嫌なの」

「そりゃ分かるけど、僕は……」

「とにかく」仁美は雅史の言葉を遮って言った。

「とにかく、百花が小学校に入学するまでに別れておきたいの。幸い、実家は同じ校区だからこれまで待ってられたのよ。そうでなければ……」

「どっちにしろ、別れるつもりではあったってこと？ リストラされたって話をした時にそう決めてたって言うのか？」

「そうね、少しは思ったわ。その上で毎日いろいろ考えて、こういう決断を下したのよ」

「そんな……。確かに職を失うのは大変なことだけど、それだけで別れようと思うなんて。それじゃ、今までの生活は何だったんだよ。この10年、築いてきたものは何だったんだよ」

雅史が必死になって言い募ると、仁美はふいに笑みを浮かべた。その笑みは、雅史が今まで見たことのない、暗く意地悪な笑みだった。

「築いてきたもの？ 私、あなたと何かを築いてきたつもりはないわ。ただ私は、安心が欲しかっただけ。真面目に働いてくれて、浮気もしなくて、私にも子供にも優しい人であればそれでよかった。その点、あなたは完璧だったわ。だからこそ、私も一生懸命、いい妻、いい母を演じてきたの。でも仕事を失ったあなたと一緒にいる意味は、もうないわ」

雅史は、まるで頭をぶん殴られたような衝撃を受けた。

この10年、華やかな生活ではなかったが、自分なりに仁美と百花との生活を作り上げてきたつもりだった。自分と同じように、仁美もささやかな幸せを感じてくれていると思っていた。すべてを否定されたような気がして、雅史は何も言うことができなかった。

「それじゃ、お願いね」

しばらくの沈黙の後、雅史が何も言わないと分かったと、仁美はそう言って席を立った。

寝室から大きなバッグを持って出てきた仁美は、雅史の背中に声を掛けた。

「他の荷物もなるべく早く取りにくるから」

振り向くと、百花が仁美に手を引かれていた。反射的に、雅史は声を上げた。

「百花！」

「パパ、行ってきまーす」

まだ何も知らされていないのか、百花は無邪気に手を振って出て行った。

ドアが閉まり、静かな家に1人残された雅史は、ただ立ち尽くしていた。

どこをどう歩いたのか、気付いたらカリナが歌っている駅前広場まで来ていた。

カリナのの前には、数人のお客さんがいた。まだファンがつくというほどではないものの、通行人が少しずつ足を止めるようにはなっていた。

遠くから見ても、カリナは輝いていた。両親と和解したという連絡はないから、きっとまだ両親の理解は得られていないのだろう。それでも自分の生き甲斐を見つけたカリナが随分遠くへ行ってしまったように、雅史は感じていた。けれどそれは、悲しいとか悔しいとか、そういう感情ではなかった。巣立つ子供を見守る親のような気分だった。

——カリナちゃんはもう大丈夫だ。僕が話を聞いたり励ましたりする必要はもうない。

雅史は、カリナに気付かれないうちに、その場を離れた。

カリナと出会った日のように、賑わう街を雅史は歩いていた。仁美と百花のいない家に帰るのは辛かった。こんな時、助けを求める友人もいない。両親も数年前に相次いで他界していた。

道路脇のベンチに座って頭を抱えていても、誰も声を掛けてくる人はいない。ただ目の前を、誰もが忙しく通り過ぎていっただけだった。

雅史には、まるで自分がこの世に存在しないかのように思えた。

——そうか。本当にこの世からいなくなってしまうえばいいんだ。どうせ誰も、僕のことを必要とはしてないんだから。

雅史は心を決めると立ち上がり、最期の場所を探して歩き始めた。

雅史の下を、何本もの電車が通り過ぎていく。そこにはたくさんの人が詰め込まれ、疲れきった顔で溢れかえっていた。鉄橋の上からしばらくその様子を眺めていた雅史は、おもむろに靴を脱いできれいに揃えた。

——死のうとする時にわざわざ靴を揃えたりするもんなのかなって思ってたけど、本当にやってしまうもんだな。

そんなくだらないことを考えながら、手摺によじ登っていると、遠くで声が聞こえた。

「後藤さん！」

周りを見回すと、階段を息を切らして上がってくるカリナが見えた。

「後藤さん！」

カリナはもう一度叫びながら、雅史にしがみつき、力いっぱい引っ張った。カリナが来たことに驚いて力が抜けていた雅史は、カリナの予想に反して簡単に手摺からはがされてしまった。当然のように、雅史とカリナは一緒になって地面に転がった。

「いったーい！」

カリナが、上に乗っかる形になった雅史を押しよけながら、怒ったように言った。

「何やってんのよ、後藤さん」

「カリナちゃんこそ、なんでここに？」

「さっき広場に見に来てくれてたでしょ」

「あ、気づいてたんだ、気づかれないようにしたつもりだったんだけど」

「バレバレだったわよ。でもなんだか様子がおかしかったから、慌ててライブやめて、探してたの」

「そうか、それは悪いことをしたな」

雅史がそう言うと、カリナは呆れたように言った。

「他人ごとみたいなこと言って」

2人は服の汚れをはたき、手摺にもたれて座った。

カリナが少し言いにくそうに、そしてそれを隠すようにわざと乱暴に言った。

「で？ いったい何があって、こんなことをしようと思ったわけ？」

雅史がこれまでのことをすべて話すと、カリナは「そっか」と一言呟いて、黙り込んだ。雅史もそのまま黙り込み、2人はただ並んで座っていた。その間も、下ではどんどん電車が押し出されていく。

——さっきカリナちゃんが来てなければ、今頃大騒ぎになってるんだよな。

不思議な気持ちで、雅史は眺めていた。

どれくらいそうしていたのか、カリナが口を開いた。

「人はね、みんな天使なんだよ」

「天使？」

突然何を言い出すのかと、雅史はいぶかりながら聞いた。

「そう。自分の舞台で人生という作品を演じ続けるように、神様に命じられて生まれてきたの。でもこの世界の天使には羽根がついてない。飛べない天使は、辛いことも悲しいことも避けては行けない。全部自分の足で踏みしめていかなきゃなんないの」

雅史のほうを見ることもせず、まっすぐ前を見てカリナは言った。

「神様はずいぶん意地悪なんだな。羽根があれば楽しいことだけですむのに」

「違う」カリナは雅史を見て、きっぱり言った。

「辛いことや悲しいことがあるから、楽しいことを楽しいって思えるんだよ」

「それは理想論だよ。楽しいことだけの方がいいに決まってるさ」

雅史が軽く笑って言うと、カリナは真剣な顔で首を振った。

「理想論じゃないよ、事実だよ。考えてみてよ。宝くじで1万円当たった時、大金持ちとその日暮らすのに精一杯な人、どっちが喜ぶと思う？ それと同じ。楽しいことばっかだと、その価値が分かんなくなってくるんだよ。当たり前になっちゃうから」

「……」

「だから逃げちゃいけないの。それにほら、羽根がないんだったら、逃げたって楽なところに行けるとは限んないよ。それなら前に進んだ方が得じゃない？」

「得か」

雅史は苦笑いして言った。

「ついでに言えば、離婚されたのだって、考えようによっちゃ得よ。だって背負うものが減ったんだもん。人間って、背負うことによって頑張れたりもするけど、今の後藤さんには荷物は無い方がいいと思う。その方が気楽に頑張れるんじゃない？」

「そうだな、確かにそうかもしれない」

いつしか雅史の心は晴れてきていた。まだ快晴というわけにはいかないが、とりあえず雨雲は去っていった。ここまではカリナのお陰だ。これから快晴になるかどうかは、自分次第だった。

――逃げるのはいつでもできる。それなら今逃げなくてもいいじゃないか。

雅史はカリナをまっすぐ見て言った。

「ありがとう。もう一度頑張ってみるよ」

「うん。私が歌を認められてスターになると、後藤さんがバリバリ仕事しだすの、どっちが先が競争だね」

「どっちもずっと先だろうなあ」

「またそんな弱気なこと言って」

カリナと雅史は声を上げて笑った。

「さて、と。腹減ったな。ラーメンでも食べに行かないかい？ 助けてもらったお礼におごるよ」

「どうせおごってくれるんなら、もっといいものおごってよ」

「失業中の身なんだからさ、勘弁してくれよ」

「しょうがないなあ」

カリナが笑って歩き出すと、雅史がふと思いついたように言った。

「さっきの話、歌にしてみたら？」

「さっきの話って、後藤さんの離婚の話？」

「違うよ。まったく、人の傷に塩をぬるようなことを……」

雅史は苦笑いして続けた。

「天使の話だよ。なかなか説得力あったからね」

「ほんと？ほんとにそう思う？」

「うん。きっと伝わるよ」

その日から、また雅史の闘いが始まった。今までと違うのは、仁美や百花のためではなく自分自身のためだという点だった。自分の舞台をしっかりと守っていくために、雅史は新たな気持ちで就職活動に励んだ。時々、カリナのライブを陰から見ては、力をもらっていた。

そのカリナから、両親と和解したというメールが入ったのは、それから1ヶ月以上過ぎてからだった。

カリナは、両親に歌手になりたい宣言してから2ヶ月もの間、説得し続けていた。自分のまっすぐな気持ちを根気よく伝え続けたのだ。どうせすぐに飽きるだろうと思っていた両親も、ついにはカリナの思いを受け入れたらしい。

カリナからのメールにはいつも以上に絵文字やエクスクラメーションマークが使われていて、カリナの喜びや興奮が伝わってきた。雅史も自分のことのように嬉しくて、普段使わない絵文字を使ってしまったくらいだった。

それから3日後、雅史はカリナのライブを見に行った。

5月に入り、天気の良い日の昼間は暑いくらいだったが、夜になるとちょうどよかった。そのせいもあるのかもしれないが、カリナの前には人の輪ができていた。いつだったか、カリナの路上デビューの時に見たバンドのように、カリナの前に座り込んで聞き入っている若者もいる。雅史がここに来るたびに、カリナの歌を聞いている人は増えていた。

人の輪から少し離れて、雅史はカリナを見守っていた。初めての時と比べて、ずいぶん貫禄がついたようだ。堂々と歌うカリナは、もう既にプロになったかのように見えた。

「皆さん、長い時間聞いてくださって、ありがとうございます。とうとう今日最後の曲になりました」

カリナがキーボードの前でマイクに向かって話した。

「この曲は、私の大切な友達との会話から生まれた曲です。生きていたら辛いことも悲しいこともいっぱいあるけど、それを乗り越えて前を向いて歩いていこう、そんな気持ちを歌っています。それでは聞いてください。『羽根のない天使たち』」

ねえ、泣かないで
生きてるってこと楽しんで
ねえ、笑ってて
生きてるってこと喜んで
人はみんな天使
羽根のない天使
どんなことだって自分の足で感じよう
辛いことの後には楽しいことがあるから
何があっても逃げないで
いつも私がついてるよ

雅史はあの時を思い出しながら聞いていた。観客の中からは、鼻をすする音が聞こえていた。カリナの歌声に心を動かされる人間は、確実に増えているようだった。

ライブが終わり、カリナと雅史だけが残った。雅史はゆっくりと近づき、カリナの片づけを手伝いながら言った。

「新曲、よかったよ」

「ほんと？ ありがと。後藤さんが見えたから緊張しちゃった」

カリナは肩をすくめて照れくさそうに笑った。

「ご両親にも認めてもらえたことだし、もうあとはひたすら突き進むだけだな」

「うん。実は昨日、来てくれたの。それまでは、歌をやることは認めてくれたものの、私が辛い思いをしてきたことは、いまいちピンとこないようだったのね。でも昨日のライブを見て『分かった気がする』って言ってくれたの。『今まで見てきたカリナの中で、1番輝いてた』って」

「よかったじゃないか」

「うん。これからはますます気合入れなきゃね」

カリナは思いっきり幸せそうに笑った。

「僕もやっと再就職先が決まったよ」

雅史がさりげなく言うと、カリナは目を丸くした。

「ほんと？」

「ああ。すごく小さな会社だけどね」

するとカリナは巻いていたコードを放り投げて雅史に抱きついた。

「やったー！」

「お、おい、人が見てるよ」

雅史が慌ててカリナを引き離す。

「いいじゃない、めでたいことなんだから」

「それにしても、カリナちゃんはスターの卵なんだろう？ スターになった時、こんなことが公になったら困るんじゃないかい？」

「ほんとだ。私は未来の大スターだからね」

カリナが胸をはり、2人は笑った。

「でもここまでこれたのは、カリナちゃんのお陰だよ。時々見に来ては元気をもらってたんだ」

「ありがと。後藤さんが来てたの、知ってたよ。でもね、私だって後藤さんのお陰なんだよ」

「僕の？」

「そう。路上ライブを始める勇気をくれたのも後藤さんだし、始めてからも、後藤さんの姿を見て『あー、後藤さんも頑張ってるんだな。私も負けてらんないな』って気合入れ直してたの。だから聞いてくれる人が少なくても続けてこられたんだよ」

「そうか」

「これからは本当の競争だね。どっちが先か分かんないけど、きっと2人とも成功する。私、今なら自信持って言える」

「そうだな。僕もそう思うよ」

目の前には高い山も深い谷もある。風が強い日も土砂降りの日だってある。だけどそれを自分の足でしっかり踏みしめた人にだけ感じられる幸せがあるということ、2人は知ったのだ。

片づけが終わり、雅史はカリナに手を差し出した。最後の別れのつもりだった。カリナもその意味を察し、強く握り返した。

「さよなら」「元気で」

カリナは荷物を抱えて雅史に背を向けた。カリナが1歩踏み出すのを見て、雅史も振り返って歩き出した。

2人の本当の人生が、今、始まろうとしていた。

(完 結)

羽根のない天使たち

<http://p.booklog.jp/book/43631>

著者 : nagomino-riko

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/nagomino-riko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43631>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43631>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.